

松 山 大 学 論 集
第 32 卷 第 6 号 抜 刷
2 0 2 1 年 2 月 発 行

評伝 入江奨先生の人と学問（その5）

—— ある経済学史研究者の真摯な人生 ——

川 東 淸 弘

評伝 入江奨先生の人と学問（その5）

—— ある経済学史研究者の真摯な人生 ——

川 東 埴 弘

目 次

はじめに

第一章 生誕から松山商科大学就任まで

（1923年6月～1951年3月）

第二章 松山商科大学教員時代

第1節 松山商科大学一教員時代

（1951年3月～1973年3月）

1) 1951（昭和26）年度

～

3) 1953（昭和28）年度（以上、その1、第32巻第2号）

4) 1954（昭和29）年度

～

13) 1963（昭和38）年度（以上、その2、第32巻第3号）

～

22) 1972（昭和47）年度（以上、その3、第32巻第4号）

第2節 経済学部部長・大学院経済学研究科長時代

（1973年4月～1984年3月）

1) 1973（昭和48）年度

2) 1974（昭和49）年度（以上、その4、第32巻第5号）

3) 1975（昭和50）年度

4) 1976（昭和51）年度

5) 1977（昭和52）年度

6) 1978（昭和53）年度

7) 1979（昭和54）年度（以上、本号）

8) 1980（昭和55）年度（以下、次号）

～

11) 1983（昭和58）年度

第3節 再び教授に戻って（1984年4月～1989年3月）

第4節 再雇用期の入江先生（1989年4月～1994年3月）

第三章 退職後の入江先生（1994年4月～2005年4月）

おわりに

3) 1975 (昭和 50) 年度

経済学部長3年目。

入江先生赴任25年目、経済学部長3年目、51歳～52歳にかけての時期である。学校法人の評議員を務めている。

学長は太田明二（2年目）、経済学研究科長は望月清人が引き続き務めている¹⁾。

4月1日、入江学部長は『学園報』第30号（新入生歓迎号）に「学識深く教養高き人材」と題した挨拶文を寄せた。その大要は次の如くで、学生の自主性、能動性を強調するものであった。

「高校生活と大学生生活は著しく異なっています。大学にも高校と同じくクラスがありますが、講義のための手段に過ぎません。大学における生活の場はグループであり、サークルです。指定されたものでなく、学生自身が選んだものです。ゼミナールがそうであり、学友会の部などがそれです。

だから能動的な活動がおこなわれなければ、生活の場そのものが成り立ちません。

大学は相互批判が渦巻くところです。能動性が基本であるところの当然の帰結です。この大学生生活の根幹をなしているのが『学問の自由』です。教員の見解を批判し誤りを指摘する自由がありますが、そのことを論証する責任も求められます。これが『学問の自由』を根幹とした生活です。不統一な相異なる見解が提示される、これが大学です。

1) 『六十年史（資料編）』126～131頁。

ですから能動的主体的な思考活動が行なわなければ收拾がつかなくなるでしょう。進んで未知の見解を求め、多くの異見に接し、そのなかから自分の見解を探り当てていく。私たちは皆さんとそのような自由と進取の創造の場を作りあげたい、と念願しています。学識深く教養高き人材は皆さん自身の自主的な創造的な活動による以外には作られないでしょう。1975, 3, 15]²⁾

4月7日午前10時、体育館において、入学式が挙行され、経済学部は489名、経済学研究科修士課程は5名（渡辺利文ら）が入学した³⁾。渡辺利文は入江先生を指導教授とした。

本年度、経済学部の新教員として久保進（英語）が助手として採用された。

本年度の入江先生の担当科目は、前年と同様、基礎教育科目のマルクス経済学、一般演習、経済学史、ゼミ1, 2, 短大の経済学Iであった。また、大学院では修士課程1年の渡辺利文を指導している。

マルクス経済学の講義は前年とほぼ同様で、マルクス経済学の研究方法、価値法則、剰余価値生産の法則、資本蓄積の法則、資本の流過程、生産価格法則、資本蓄積・競争のなかでの金融資本に関する問題、資本制の基本矛盾等を講義し、フリーノート方式で、主要参考書として、金子ハルオ・林直道『経済学（上・下）』を使用した。

経済学史の講義も前年とほぼ同様で、古典派経済学の生成・発展、そして、経済学の諸分化への動きを検討し、現代の経済学への道程を考察するものである。教科書として、入江奨『経済学史講義』（プリント）を使用した⁴⁾。

経済学史を受講したゼミ生の須賀敏樹（1977年3月卒）の講義の感想を記しておこう。

2) 入江奨「学識深く教養高き人材」『学園報』第30号（新入生歓迎号）、1975年4月1日。

3) 『六十年史（資料編）』174, 161頁。

4) 『1975年教授要目』

「入江先生の講義は難解でした。でも、つたえようとする情熱がすごく伝わってきました。『経済学史』の試験の前の日、それまでまとめていた先生の講義ノートと教科書で勉強しました。リカードの価値論の矛盾をマルクスが解決(弁証法的唯物論での正しい表現ができなくてごめんなさい)したところ、講義の中での先生の言葉と教科書に書かれていることを、繰り返し考え続けました。真夜中の3時ごろでしょうか。わかったのです。私はピョンピョン飛び跳ねていました。何百年も前のマルクスと同じ気持ちを今感じている。入江先生は、講義の中ですごい内容を伝えてくれたんだ。勉強ってこんなに面白いものなんだ。熱い頭で部屋を歩き回っているうちに朝がやってきました」⁵⁾

本年のゼミ1には、一色、伊藤、岡崎、川江、久保(社会科学研究部)、佐田(経済研究部)、篠崎、須賀敏樹、平田、広川、藤井、松本、安永、湯川、渡辺らが入った。

ゼミ1ではマーシャルの『経済学原理』を英文で読んでいる(2年計画)。また、前年と同様サブゼミとして、近経班、マル経班、古典班、現状分析班に分かれて、個別指導した。

ゼミ2(原田、亀井らの学年)も昨年の続きとして、マーシャルの『経済学原理』を英文で読み、サブゼミも継続している⁶⁾。

入江ゼミの2年間の活動を、広川匡(1977年3月卒)の回想から見ておこう。

「大洲青年の家での合宿に始まり、週1回のゼミ、サブゼミの開始、学内大会、夏休み内子の合宿、そして大学祭のバザーとのど自慢、中四国大会、インター、つくし会、追い出しコンパ、ゼミ旅行、春合宿、…卒論。

5) 須賀敏樹「入江先生へ」『つくし』第29号、2006年1月、30頁。

6) 『1975年教授要目』

同じ目的に向って皆んなで努力した時間、今にして思えば何と充実した時間であったか。そして皆んなで飲んだ酒なんてうまかったことか。なんて楽しかったことか。あの時、あの時の友達の顔が浮かぶ」⁷⁾

また、入江先生はゼミ連顧問を続けている。

入江先生は、「昭和五〇年度の経済学部」と題した現況報告を『温山会報』第18号（1975年8月）に載せている。その大要は次の通りである。

「大学は、ご存知のように、規格品を与えるところではなく、技術の手ほどきを提供し、思考の素材と模型を提供し、教員と学生が共に創意工夫の努力を傾け、真実への路を求め、社会の一員として相互に尊重しながら交流し、共に高められていこうとする性向にみがきをかける場です。ですから、いわゆる少数教育が骨格とならねばなりませんし、討論可能なグループが核とならざるをえません。大学で演習が重視されるのは、そのためです。

わたしたちは、そのような学園の維持発展のため微力を傾注しています。けれども、学園をとりまく環境は、ますます厳しいものとなっており、ともすると挫折感をさえ覚えるほどです。（中略）

現在の学部学生総数は一九〇八名（うち女子二六一名）、このなかには、五年次以上が九二名（うち女子〇名）含まれています。そして、その主要部分は四年次時の留年者です。去る三月、四年時生四三七名中卒業無資格者が七七名、休学者一名、再試欠席者二名、再試合格者四七名、当初卒業有資格者三一〇名（卒業三五七名）。この状況から問題をとらえていただけのでしょう。更にこの三月「三年次配当科目履修資格」について四六〇名中六七名がバーにかかっています。

7) 広川匡「また会う日まで」『つくし』第9号、1977年4月1日、37頁。広川匡「ほろ苦い貴重な青春を回顧しつつ」『つくし』第25号、2000年7月、48頁。

この矛盾にみちた深刻な状況の中で、学部教育の在り方を検討し、四四年度から実施している現カリキュラムの改革を志して三年目。その最終段階に入ろうとしています。自由化路線、理論教育強化、ゼミの質の維持強化、が眼目です。

この矛盾にみちた局面の中で、ゼミ交流、ゼミ合宿などは、普及拡大しています。部活動の弱화를憂いつつもこのゼミ活動の活発化を大きな支柱としながら、前進の路を求めているところです（五〇・六・一〇）⁸⁾

7月、経済学部では、京都大学池上惇教授を招き、学術講演会「七十年代と日本経済」を行なった⁹⁾

本年度、第22回全日ゼミ（横浜市立大学）、第15回中四ゼミ、そして久しぶりに第9回学内ゼミ（第8回は1972年度）が開催された。入江ゼミの川江一夫（3年）は学内ゼミ大会でケインズを発表し、また、横浜でのインゼミに参加し、次のように回想している。「想い起こすと、勉強の深みはともかく、ほかのゼミを論破してやろう、他大学に負けてたまるか、といった熱き心をエンジンに、ゼミメンバー間で、夜遅くまで、議論していた時分のことが鮮やかに甦ってくる」と¹⁰⁾

12月3日、太田理事長ら大学側が文部省に申請していた入学定員の増加（経済・経営学部の定員を来年度から250名を300名に増やす）の認可がおりた¹¹⁾

1976（昭和51）年2月11日、1976年度の入試が行なわれた。経済学部の募集人員は350名（文部省定員は300名）で、経済学部の志願者は1,779名であった。合格発表は2月19日で、経済学部の入学目標は470名で、歩留り率を考慮し、経済学部958名を発表した¹²⁾

8) 入江奨「昭和五〇年度の経済学部」『温山会報』第18号、1975年8月。

9) 『六十年史（資料編）』72頁。

10) 川江一夫「『採用の現場』から見た、後輩たちの実像～急ぐべき、ゼミ活動の復興～」『つくし』第29号、2006年1月、53頁。

11) 『六十年史（資料編）』72頁。

3月19日、第25回卒業式が行なわれ、経済学部は380名が卒業し、経済学研究科修士課程は1名が修了した¹³⁾ 入江ゼミでは、秋山(経済研究部)、岡田、亀井嘉朗、木田、喜井、神山、下津、高岡、田口、武村、原田、中矢、松永、白川ら23名が卒業した。このうち、亀井嘉朗は1977年4月大学院経済学研究科に進学する。

3月下旬、大学院経済学研究科(修士・博士)の入試(第2次)が行なわれ、12名が受験し、4名が合格した¹⁴⁾

3月30日、50年記念館(新図書館と研究室、地下1階、6階建)が本館南側に完成・竣工した。近代的な建物であった。

3月31日、岩田裕助教授(経済政策概論、計画経済論)が退職し、高知大学文理学部に転出した。

4) 1976(昭和51年)年度

経済学部長4年目。

入江先生赴任26年目、経済学部長4年目、52歳～53歳にかけての時期である。学校法人の評議員を続けている。

学長は太田明二(3年目)、経済学研究科長は望月清人が引き続き務めている¹⁾

入江先生は4月5日の『学園報』第33号(新入生歓迎号)で「新入生を迎えて」と題し、大要次のような歓迎の辞を述べた。

「わが学園が創立されて53年、経済学部が出来て14年、私達はその時々
の問題と真剣に取り組み、現在の学園の在り方を作りあげてきました。私

12) 松山商科大学『昭和51年度入学試験要項』、『六十年史(資料編)』174頁。中原成夫「昭和51年度入試結果の概要」『温山会報』第19号、1976年10月。

13) 『六十年史(資料編)』141頁。

14) 『六十年史(資料編)』161頁。

1) 『六十年史(資料編)』126～131頁。

たちは真剣に創りあげたものだけに、誇大宣伝している気持ちは全くもっていません。

皆さんは今日から学園の仲間。共に悩み共に解決の努力を開始してくれることを期待してやみません。私たちの悩みは、学問する場の大学が学問をする場に徹していないという点にあります。先日の卒業判定の教授会で卒業認定されたのが6割弱しかおらず、再試験で2割が可能性を残しているが、2割を超えるものが卒業不能ということでショックを覚えております。

今年卒業した諸氏が第3年次に本学で全日本学生経済ゼミナール大会が開かれ、全国から3,000名を超える学生が集まり、4日間にわたって研究成果の交流が行なわれました。この行事が本学学生の研究活動にかならずプラスの影響を与えるだろうと確信していました。ところが結果は先に述べた通りでした。

この重大な原因について、直感的にいいますと、大学のレジャー部門化と無関係ではなからうと考えています。学問を逃避する学生から学問を追求する学生という本道に立ち戻らせるにはどうしたらよいか。問題を考える出発点はこれ以外にない、と直感的に考えています。

だからこそ、新しく入学された皆さんを復興の担い手として迎えたいし、学園復興の仲間としてそのエネルギーに期待したいのです。

読書は著者との交流です。仲間づくりです。自分が関心をよせる問題を持たない大学生、その問題に関する著者名、論者名を知らない大学生、著書や論文に接しない大学生、これらは大学生の名に値しません。

読書と研鑽の仲間づくりから、皆さんの生活が始まることを衷心より期待いたします」²⁾

2) 『学園報』第33号（新入生歓迎号）、1976年4月5日。

4月初め、午前10時より体育館において入学式が挙行され、経済学部は421名、経済学研究科修士課程は4名が入学した³⁾。入江先生の大学院指導生はいなかった。

本年度、経済学部に新しい教員が採用された。村上克美（経済政策概論）、梶原正男（国際経済論、国際金融論担当）、月岡利男（民法物権）が助教授として、前田繁一（政治学担当）が講師として採用された。

本年度の入江先生の担当科目は、前年と同様、基礎教育科目のマルクス経済学（2単位）、一般演習（2単位）、経済学史（4単位）、ゼミ1、2（各4単位）、短大の経済学Ⅰ（2単位）であった。そして、大学院の経済学史で、修士2年の渡辺利文を指導している。

マルクス経済学はカリキュラムの変更で2単位となったが、その講義内容は、前年とほぼ同様で、主要参考書として、金子ハルオ・『経済学（上）』、林直道『経済学（下）』新日本出版社、ならびに新マルクス経済学講座1『マルクス経済学入門』有斐閣を使用した。

経済学史の講義も、前年とほぼ同様で、重商主義からはじめ、古典学派の生成・発展・転化の経過を追い、現代経済学の歴史的特徴について、講義している。参考書は、経済学史学会西南部会編の『経済学史研究』『近代経済学史研究』ミネルヴァ書房であった⁴⁾。

今年のゼミ1には、織田、金田、笠原、川澄（ゼミ連）、鈴木、平塚らが入った。

ゼミ1のテキストは本年もマーシャルの『経済学原理』を英文で読んでいる。また、サブゼミとして、前年と同じく、現状分析班、近経班、マル経班、古典班の4部門にわけ、指導した。現状分析班は帝国主義論、国家独占資本主義論の文献を読み、学内ゼミ、中四ゼミをめざし活動した。近経班はケインズ的一般理論を研究し、6月の学内ゼミ、12月のインゼミ福岡大会をめざし活動し

3) 『六十年史（資料編）』174頁、161頁。

4) 『1976年教授要目』

た。マル経班は資本論を中心に各自研究し、学内ゼミ大会にのみ出席した。古典班はスミスの国富論を研究したが、各人クラブで多忙で学内ゼミも中四ゼミも不参加であった⁵⁾。

ゼミ2（川江らの学年）のテキストも前年に引き続きマーシャルの『経済学原理』を英文で読んでいる。また、サブゼミを続け、卒論作成を指導している。

また、入江先生はゼミ連顧問を続けている。

入江先生は本年度の「経済学部に関すること」と題し、『温山会報』第19号（1976年10月）に報告している。その大要は次の通りで、学生の授業への出席率の悪いこと、教員の充実、学生との接触の強化、未組織学生、留年の増加などが経済学部の課題であったことを述べている。

「『過密のなかの過疎』という言葉が、全国私大教授会連合作成の私大白書でのなかで用いられました。定員超過学生数が多い反面、通常の教室への出席状況がきわめて悪いという問題を表現するものです。私たちも残念ながらこの問題を重視せざるをえません。

教員数の充実、それに基づく学生との接触の強化が、当面の切実な課題になっているのですが、なかなか解決の方向が生れずモヤモヤしているところ です。

未組織学生の増加傾向にどう対処するか、留年などの増加にどう対処するか、『寺子屋方式』から再出発する必要があるのではないかと。悩みは尽きません。そして、それぞれやむを得ない事情からではありましたが、三名の教員が辞められ、四名の教員を迎えました。教員陣容の変動は、大学院博士課程完成期の昭和五二年三月末、大規模におこなわれるのではないかと。問題山積で苦闘の状況にあります。そのなかで交換学生制度の発足は、経済学部にとっても、一つの光です。（五一・七・一）⁶⁾

5) 入江ゼミ活動報告『つくし』第9号、1977年4月1日、10～13頁。

6) 『温山会報』第19号、1976年10月。

本年度も、6月に第10回学内ゼミ、第16回中四ゼミ、12月に第23回インゼミ（福岡大学）が開催された。入江ゼミは学内ゼミ、中四ゼミ、インゼミに参加した。

入江先生は、大学院では渡辺利文（修士2年）を指導している。大学院時代の研究指導について、渡辺利文の「入江先生の思い出」を紹介しよう。

「私は、一九七五年から二年間、松山商科大学大学院経済学研究科の修士課程で入江先生から経済学史の指導を受けました。特に、古典派経済学のアダム・スミス、デビット・リカード、そして、カール・マルクスの再生産論の特徴について学びました。その過程で私がマルクスの過剰生産恐慌との関わりで再生産表式に関心を示し出すと、入江先生は、マルクスが再生産表式を構想し始めた研究プロセスやマルクス以後、表式がどのように利用されてきたか学説史的な研究をしておくことの必要性を強調されました。そこで、修士論文では、マルクスの恐慌論体系における再生産表式の意義と役割という形で学説史的な分析をおこないました。そして更に、博士後期課程に進んでこの研究を深めることにしました」⁷⁾

1976（昭和51）年12月末で太田明二学長の任期が満了するので、11月に学長選挙が行なわれ、人文学部長の伊藤恒夫教授（64歳）が当選した。

1977（昭和52）年1月1日、伊藤恒夫が第6代松山商科大学長・理事長に就任した。

2月11日、1977年度の入試が行なわれた。経済学部の新入生は350名（文部省定員は300名）で、経済学部の志願者は2,123名であった。合格発表は2月18日。昨年と同様に入学目標を経済470名とさだめ、昨年度の歩留り率を参考に、経済学部は1,086名を発表した⁸⁾

7) 渡辺利文『入江先生の思い出』『温山会報』第62号、2020年2月。

2月12日、入江奨経済学部長の任期満了に伴う経済学部長選挙が行なわれたが、過半数を超える当選者がいなく、伊達功、稲生晴教授の再選挙が2月21日に行なわれ、伊達功教授（52歳）が当選した⁹⁾。

3月19日、午前10時より体育館にて第26回卒業式が行なわれ、経済学部は440名、経済学研究科修士課程は6名（渡辺利文ら）が修了した¹⁰⁾。入江先生指導生の渡辺利文は松山商科大学大学院博士課程に進学する。入江ゼミでは一色、伊藤、岡崎、川江、久保（社会科学研究部）、佐田（経済研究部）、篠崎、須賀、平田、広川、藤井、松本、安永、湯川、渡辺ら22名が卒業した。

『つくし』第9号（1977年4月1日）に卒業論文名が掲げられているので紹介しておこう¹¹⁾。入江先生が引き続き、幅広く卒論を指導していたことがわかる。

- ①現状分析班 「現代の資本輸出－資本輸出の可能性と必然性－」「日本資本主義の対外進出と日米関係」「中小企業問題について」「東南アジアにおける日本資本主義」「エネルギー問題」「世界経済の中の南北問題－一次産品問題を中心として－」
- ②近経班 「金融と経済」「マーシャル経済学の方法についての考察」「『ハロッドのマーシャル観』批判」「M・フリードマンの学説とその政策的提言」
- ③マル経班 「価格形態と貨幣の必然性」「『経済学・哲学手稿』における『労働疎外』論」「デフォウの描いている経済人について」「マルクスの貧困論について」「『貨幣の資本への転化』について」

8) 松山商大『昭和52年度入学試験要項』、『学内月報』第3号、1977年3月1日。『六十年史（資料編）』161、174頁。中原成夫「昭和52年度入試結果の概要」『温山会報』第20号、1977年9月。

9) 『学内月報』第3号、1977年3月1日。

10) 『学内月報』第4号、1977年4月1日。なお、1976年10月の前期卒業生を含む。『六十年史（資料編）』141頁、161頁。

11) 『つくし』第9号、1977年4月1日。

「男女同一労働同一賃金」

- ④古典班 「アダム・スミス『生産的労働』概念の検討」「スミス再生産論」「『国富論』における都市と農民」「必需品（Necessaries）と贅沢品（Luxuries）」「アダム・スミスの植民地論と米国の対立」「婦人問題－女性の地位の変遷について－」

3月23日、大学院経済学研究科（修士・博士）の入試（第2次）が行なわれ、修士課程は8名が受験し、4名（亀井嘉朗ら）が合格した。博士課程は1名（入江先生指導生の渡辺利文）が合格した¹²⁾。博士課程の合格は開設以来4年にしてはじめてであった。

3月31日、入江先生は4年間にわたる経済学部長職を退任した。

5) 1977（昭和52）年度

入江先生赴任27年目、53歳～54歳にかけての時期である。入江先生は4年にわたる学部長職をおり、一教員にもどった。学校法人の評議員は続けている。

学長は伊藤恒夫（1年目）が続き、経済学部長は伊達功が新しく就任した（1977年4月1日～1979年3月31日）。経済学研究科長は望月清人が務めている¹⁾。

4月7日、午前10時より体育館において入学式が挙行され、経済学部は493名、経済学研究科修士課程は4名（亀井嘉朗ら）、博士課程は1名（渡辺利文）が入学した²⁾。修士課程1年の亀井嘉朗（1976年3月卒、入江ゼミ）は入江先生を指導教授とした³⁾。また、博士課程に入学した渡辺利文も引き続き入江先生

12) 『学内月報』第4号、1977年4月1日。『六十年史（資料編）』160、161頁。なお、修士の受験、合格は1次、2次入試を合わせた人数。

1) 『六十年史（資料編）』126～131頁。『学内月報』第5号、1977年5月1日。『学内月報』第6号、1977年6月1日。

2) 『六十年史（資料編）』174頁、161頁。なお、入学生数は5月1日現在。

3) 亀井嘉朗（1976年3月卒）「素直な生き方」『つくし』第29号、2006年1月、28頁。

を指導教授とした。

本年度、経済学部の新教員として吉田建夫（経済原論C）が講師として採用された。

4月1日、入江先生は『つくし』第9号（1977年4月1日）の巻頭言に「松山商大に関するデマと真実」なる文章を載せている。その大要は次の通りである。

「今、商大で校名が変更され、法学部がつくられるというデマが流れています。校名変更は人文学部がつくられた時点から問題にされてきたものです。では人文学部は総合化の第一歩であったのか、見方はいろいろありますが、学校経営屋的発想による総合化ではなかったことは、多少関与したのものとしてはっきり言っておきたいとおもいます。

総合化の動きは、現在の経済・経営両学部が造られた時点から始まっており、その時点から単科大学ではなくなっています。

法学部の青写真は皆無とは言いませんが全くつくられていません。一部にある法学部待望論が結合してデマが発生しているに過ぎません。既存学部がどういう状況になっているかを考えずに、抽象的願望を掲げるものがあるとしたら、学園の充実に責任をもつ態度とはいえないと、ぼくは思っています。

松山商大にとって学部増設問題は軽々しく論じうる問題ではないと考えています。誰かが方針を決め、いつの間にか実現するという学園であったら、一大事です。松山商大はそんな無責任な学園ではないと確信しています。デマという所以です」⁴⁾

今年度から、経済学部ではカリキュラムが改正され、入江先生担当のマルク

4) 「松山商大に関するデマと真実」『つくし』第9号、1977年4月1日。

ス経済学は「経済原論A」と改称した。

本年度の入江先生の担当科目は、一般演習（2単位）、経済原論A-1（2単位）、経済学史（4単位）、ゼミ1、ゼミ2（各4単位）、短大の経済学I（2単位）であった。そして、大学院の経済学史で、修士1年の亀井嘉朗と博士1年の渡辺利文を指導している⁵⁾

経済原論A（4単位）は、A-1（2単位）とA-2（2単位）に分けられた。A-1（2単位）が入江先生、A-2（2単位）が高橋久弥で単位は合体して行なわれた。

経済原論A-1（2単位）の講義内容は、前年とほぼ同様で、マルクス経済学の基礎理論（資本論）について、具体的には商品と貨幣、貨幣の資本への転化、剰余価値生産、資本蓄積論、資本の回転、社会的総資本の再生産、生産価格論、利子生み資本論等について講義し、テキストとしてプリントを用意し、参考書は金子ハルオ・林直道『経済学（上・下）』であった。

経済学史の講義内容も前年とほぼ同様で、重商主義からはじめ、古典派の生成・発展、マルクス経済学、近代経済学の生成を講義している。テキストとして入江先生がプリントを配布し、主たる参考文献は前年と同様であった⁶⁾

今年のゼミ1には、泉、岡野、徳田、熊本、村本、窪田、河野、宇都宮、田中、宮内らが入った。

ゼミ1のテキストは教授要目では新しく、サミュエルソンの『経済学』を使用する予定になっている⁷⁾。しかし、ゼミ生の岡野と河野の2人の回想によると、ゼミ1ではマーシャルの『経済学原理』を原書で読んだと述べているので⁸⁾ 変更したものと考えられる。なお、ゼミ1では引き続きサブゼミとして4つのグループに分け、指導した。

5) 望月清人「大学院の概況」『温山会報』第20号、1977年9月。

6) 『1977年教授要目』

7) 『1977年教授要目』

8) 岡野正徳「『将来は助役』?の励ましを」、河野真之「入江先生の思い出」『つくし』第29号、2006年1月、33頁。

ゼミ2（笠原らの学年）のテキストは昨年からの続きとして、マーシャルの『経済学原理』を原書で読んでいる。また、4つの班のサブゼミを続け、卒論の指導をした⁹⁾

本年度も本学にて開催の中四ゼミ、また、インゼミ、学内ゼミがあり、入江ゼミはそれらに取り組んだ。

また、入江先生はゼミ連顧問を続けている。

本年7月に伊藤恒夫学長は新しい「学園充実計画委員会」を発足させた。経済学部からの委員は伊達功（学部長）、入江奨、宮崎満であった¹⁰⁾ 学部長をおりた入江先生も委員となった。

本年度、第24回全日ゼミ、第17回中四ゼミ（本学にて開催）、第11回学内ゼミが開催された。入江ゼミも取り組んだが、詳細は不明である。

11月18日、学校法人の評議員の任期満了（11月末）に伴う学校法人の評議員選挙が行なわれ、入江先生はまた再任された¹¹⁾

1977年12月22日に「学園充実計画委員会」の報告書が出された。学園充実の具体的課題として、教学面の充実策として定員増とともに、法学部の設置、大学院の増設（経営学研究科）、施設面で旧本館改築が打ち出された¹²⁾

1978（昭和53）年2月11日、1978年度の入試が行なわれ、経済学部の募集人員は350名（文部省定員は300名）で、経済学部の志願者は2,472名であった。合格発表は2月20日で、経済学部は955名を発表した¹³⁾

2月、望月清人大学院経済学研究科長の任期満了（3月末）に伴う研究科長選挙が行なわれ、第3代経済学研究科長に入江奨先生が選出された。

3月1日、伊藤恒夫学長・理事長ら大学側は第4番目の学部として法学部を

9) 『1977年教授要目』

10) 『学内月報』第8号、1977年8月1日。伊藤恒夫「大学の値打」『学園報』第36号、1977年8月1日。

11) 『学内月報』第12号、1977年12月1日。

12) 「学園充実委員会報告」1977年12月22日、『学内月報』第13号、1978年1月1日。

13) 松山商科大学『昭和53年度入学試験要項』、『学内月報』第15号、1978年3月1日。『六十年史（資料編）』174頁。

実現すべく法学部設置委員会を設置した¹⁴⁾

3月20日、第27回卒業式が行なわれ、経済学部は370名、大学院経済学研究科修士課程は3名が修了した¹⁵⁾ 入江ゼミでは織田、金田、笠原、川澄（ゼミ連）、鈴木、平塚ら20名が卒業した。

3月22日、大学院経済学研究科（修士・博士）の入試（第2次）が実施され、修士課程は5名が受験し、3人が合格した。また、博士課程は2名が受験し、1名（楠宣彦）が合格した¹⁶⁾ 博士課程の入学は前年度の渡辺利文に続き2人目であった。

6) 1978（昭和53年）年度

研究科長1年目。

入江先生赴任28年目、54歳から55歳にかけての時期である。

4月1日、入江先生は大学院経済学研究科科長に就任した。大学院の運営委員は伊達功と望月清人で、入江研究科長を補佐した。

学長は伊藤恒夫（2年目）、経済学部長は伊達功が続けた¹⁾

4月7日、午前10時より体育館において入学式が挙行され、経済学部は426名、経済学研究科修士課程は3名が入学した。入江ゼミ志望者はいなかった。博士課程は1名（楠宣彦）が入学し、稲生ゼミを志望した²⁾

本年度、経済学部に新しい教員として、和田茂樹（文学、前、愛媛大教授）が教授として、大浜博（フランス語）と田中七郎（英語）が講師として採用された。

本年度の大学院の授業科目および担当者を示せば、次の通りである³⁾

14) 『学内月報』第16号、1978年4月1日。『松山商科大学一覧』1980年度、137頁。

15) 『学内月報』第16号、1978年4月1日。なお、1977年10月卒業者も含む。『六十年史（資料編）』141頁、161頁。

16) 『学内月報』第16号、1978年4月1日。

1) 『学内月報』第16号、1978年4月1日。『六十年史（資料編）』126～131頁。

2) 『学内月報』第17号、1978年5月1日。なお、編入生を含む。『六十年史（資料編）』174頁、161頁。

学科目	担当者		
理論経済学			
理論経済学特殊講義	教授	経済学博士	太田 明二
同 演習			同上
計量経済学特殊講義	教授	経済学博士	国沢 信
同 演習			同上
理論経済学特殊講義	助教授		青野 勝広
経済社会学政策特殊講義	教授		渡植彦太郎
同 演習			同上
経済学史特殊講義	教授		入江 奨
同 演習			同上
経済史			
日本経済史特殊講義	教授	経済学博士	上田藤十郎
同 演習			同上
西洋経済史特殊講義	教授		比嘉 清松
日本経済史特殊講義	助教授		岩橋 勝
日本貨幣信用史特殊講義	兼任講師	経済学博士	作道洋太郎
経済政策			
国際経済論特殊講義	教授		大鳥居 蕃
同 演習			同上
比較流通経済論特殊講義	教授	商学博士	井上 幸一
同 演習			同上
経済政策特殊講義	助教授		村上 克美
交通政策特殊講義	教授		宮崎 満
国際経済論特殊講義	兼任講師	経済学博士	藤井 茂

3) 『昭和53年度松山商科大学大学院修士課程募集要項』『1978 松山商科大学案内』

国際経済論特殊講義	兼任講師	経済学博士	内田 勝敏
財政金融論			
財政学特殊講義	教授		増岡 義喜
同 演習			同上
貨幣金融論特殊講義	教授		稲生 晴
同 演習			同上
銀行論特殊講義	教授		高橋 久弥
国際金融論特殊講義	教授		梶原 正男
財政学特殊講義	助教授		山口 卓志
財政学特殊講義	兼任講師	経済学博士	山下覚太郎
金融論特殊講義	兼任講師	経済学博士	新庄 博
統計学			
統計学特殊講義	教授		松野 五郎
経済統計論特殊講義	兼任講師		北林 琢男
社会政策			
社会政策特殊講義	教授	経済学博士	望月 清人
同 演習			同上
社会思想史特殊講義	教授	経済学博士	伊達 功
同 演習			同上
社会政策特殊講義	教授		田辺 勝也
経営学・会計学			
経営学特講講義	教授		元木 淳
同 演習			同上
企業形態論特殊講義	教授	経営学博士	中川公一郎
同 演習			同上
会計学特殊講義	教授		神森 智
同 演習			

経営労務論特殊講義	教授	岩国 守男
経営分析特殊講義	教授	倉田 三郎
税務会計特殊講義	助教授	原田 満範

4月1日、前望月経済学研究科長時代（運営委員入江、伊達）から検討していた「大学院履修規程」、「履修規程細則」が制定施行された。また、「松山大学大学院論集刊行規程」も制定された⁴⁾

入江先生は経済学研究科長に就任するや、精力的に運営委員会や研究科委員会を開き、①大学院再入学に関する細則（大学院退学者の再入学のための細則）、②松山大学大学院教員選考基準（演習・特殊演習担当者となることができるものは教授になって3年経過した者、ただし博士の学位を有するものは3年を1年に短縮する、業績は著書・論文を合わせて15編以上とする。特講担当者になることができるものは助教授になって2年経過したもの、ただし博士の学位を有するものは2年を1年に短縮する、業績は著書・論文合わせて5編以上とする）、③大学院研究科委員会規則施行細則等を制定した⁵⁾ いずれも入江先生の尽力が大きい。

さて、経済学部の方にもどろう。

本年度の入江先生の担当科目は、一般演習（2単位）、経済原論Ⅰ-1（2単位）、経済学史（4単位）、ゼミ1、2（各4単位）、短大の経済学Ⅰ（2単位）であった。そして、大学院では経済学史を担当し、修士2年の亀井嘉朗と博士2年の渡辺利文を指導している。

経済原論Ⅰ-1（2単位）の講義は、前年の経済原論A-1（2単位）と同じで、前年同様高橋久弥との共同講義であった。入江先生の講義内容は前年とほぼ同様で、マルクス経済学の方法、マルクス経済学における基礎段階（「資

4) 『大学院便覧2018年』より。

5) 『学内月報』第17号、1978年5月1日。『学内月報』第18号、1978年6月1日。『松山大学九十年の略史』53頁。

本論」の段階）の輪郭，すなわち，「商品と貨幣」論（価値法則），「剰余価値の生産」論，「資本蓄積の一般法則」論，「生産価格」論，「平均利潤の分配」論を講義し，教科書は入江奨『マルクス経済学講義』（未定）となっている。

経済学史の講義内容も，前年とほぼ同様で，古典学派前史（重商主義・重農主義），古典学派の生成期，古典学派の発展期，古典学派転化期に区分して，現代経済学の生成の過程を講義し，教科書は入江奨『経済学史講義』（未定）となっている⁶⁾。

本年のゼミ1には，宇山，岡田，片岡，川元，田口，檜垣，新山，真鍋，武田らが入った。

ゼミ1のテキストはシュンペターの『経済発展の理論』を原書で読んでいる。また，前年と同様，サブゼミとして，古典経済学班，マル経班，近経班，現状分析班に分け個別指導している。

ゼミ2（河野らの学年）のテキストは引き続き，マーシャルの『経済学原理』を原書で読んでいる。また，4つの班にわけて引き続き個別指導，卒論指導している⁷⁾。

また，本年も入江ゼミでは，各種のゼミ大会に取り組んだと思われるが，詳細は不明である。

また，入江先生はゼミ連顧問を続けている。

入江先生は1978（昭和53）年度の「大学院の近況」を『温山会報』第21号（1978年9月）に報告している。その大要は次の通りである。

「現在の大学院は，残念ながら，寄生的状況のままに推移しています。大学院学生の指導は学部学生の指導の余力という状況－この事態の抜本的改革は望み得ないことですが－，しかも，学部・短大の学生の指導に教育研究のエネルギーのほとんど総てを注入した上での余力ですから，ひどい

6) 『1978年教授要目』

7) 『1978年教授要目』

ものです。現在進行中の学園充実計画の中で考えていただくことを切望しています。そうでなければ、名実ともに、大学院はお荷物となり、内部から崩壊してしまうのではないかとさえおそれているところです。(中略)

昭和五十二年度教員一覧表を見ますと、大学院担当者として一四名あがっています。この表は、文部省への報告資料と同様に、当該年度に実際に授業を行っている者の氏名だけをあげているものです。これだけで大学院教育が成り立つ訳では勿論ありません。当時の大学院演習担当専任者一四名、特講担当者二七名ですから、この一部だけが授業を現実に行っている訳です。

演習担当資格、特講担当資格者は別に定められていて、大学院教育の中心が研究指導にあることから言っても、研究能力、研究業績を日夜みがき、おさめなくては、まともな大学院とは言えない訳です。そして学部の関係者の全員が一日も速やかに演習担当者、特講担当者になることが望まれます。この点、本学の関係者は悪条件の中でみなよく頑張っていると言えるでしょう。昭和五十三年度、演習担当者一名、特講担当者一名ふえているのですから(竹中先生が赴任されたので演習担当二名、特講担当二名増となりました)。

昭和五二-五三年度に関する大学院関係事項の数値を示しておきます。
大学院専任教員二九名(うち一六名演習担当)、兼任教員五名。

昭和五三年度授業実施者、専任教員、講義一八名、演習五名。兼任〇名。

昭和五三年度在学生、太田ゼミ(修一名)、入江ゼミ(修一名、博一名)、
稲生ゼミ(博一名、修二名)、望月ゼミ(修一名)、神森ゼミ(修三名)。
計、博二名、修八名(定員、博三年計一二名、修二年、計二〇名)。

昭和五二年度修了者三名(うち一名博へ)。これまでの修了者一七名(うち二名博へ)。

昭和五三年度志願者、修七名、博二名。合格・入学者、修三名、博一名。
(五三・七・三)⁸⁾

入江先生は修士課程では亀井嘉朗（2年）、博士課程では渡辺利文（2年）を指導している。このうち、渡辺利文の大学院時代の「入江先生の思い出」を紹介しよう。入江先生の研究指導や人柄が窺われる一文である。

「博士後期課程では五年間指導を受けました。この後期課程で入江先生から研究者としての研究方法の基礎を学んだと思っています。一つは、研究テーマについて先行業績の研究をしっかりと行うことの重要性です。そして、この研究過程で自分なりの仮説を導き出すことの必要性です。先行業績の分析を充分に行わないと、仮説が単なる思いつきや主観的なひらめきに終わってしまうからです。先行業績の成果は何か、不十分な点はどこにあるのかをしっかりと分析していないと価値ある仮説は設定できません。次に、この仮説を検証することです。諸文献を基に論理的に実証するか、資料・データやケースを用いて客観的な実証分析を行うかです。あるいは、統計解析を利用しても良いと言われました。このような研究視点は、その後の私の研究態度の羅針盤になっています。

それから、私の印象に残っていることは、経済学の概念について、正確な定義や把握をすることの必要性です。今思えば当たり前の事かもしれませんが、入江先生はこの点には特に厳しかったと思います。よく「内在的理解」なんてことを言われていました。例えば、スミス経済学は二面的だと言いますが、これは、マルクスのスミス理解で、スミス自身は、例えば、「支配労働価値説」と「投下労働価値説」を混在させて、「諸国民の富」を執筆している訳ではない。では、スミス自身の立場に立てば、この二つの価値説の説明をどのように首尾一貫したものとして理解したら良いのか、スミスに内在して考えるのが内在的理解であるということです。これは、学説史特有の分析思考なのかもしれませんが、入江先生が熱心にこの

8) 『温山会報』第21号、1978年9月。

ような説明をされたのは、私の記憶に印象深く残っています。

このように入江先生との思い出について何か書けと言われると大半が研究室での先生との研究に関する対話が思い浮かびます。これは、入江先生が私の指導教官であるという立場であれば自然な姿なのかもしれませんが、私には厳しく厳格な先生だという印象に映りました。

しかし、研究を離れると温和な先生でした。当時大学内は夏休み期間中午後四時になると学内のエアコンが切れてしまいます。すると、院生室に先生からテニスをしようとしてよく電話がかかってきました。御幸グラウンドで我々院生数名と一緒に遅くまでテニスをしたものです。テニスのラリーをしていると、こちらから「先生休憩を取りましょう」と言わないと先生の方からラリーを止めようとは言われませんでした。確かお年は六十歳前後だったと推察しますが、体力的にも精神的にもタフな方でした。

先生はソフトテニス部の顧問をされていましたが、硬式テニスの腕前も確かなものでした。私も山口県内の大学で就職が決まってから退職するまで硬式テニス部の顧問をしていました。これも入江先生の影響かもしれません。陰に陽に私の研究・教育生活について入江先生から受けたものは多大なものがあり、言葉では言い尽くせない程です。今、自分の人生を振り返ってみるとそう思います⁹⁾

6月29日、伊藤学長・理事長ら大学当局は、文部省に対し、次のような定員増を申請した¹⁰⁾

学部	学科	現定員	申請定員	
経済学部	経済学科	300名	350名	収容定員 1,400名
経営学部	経営学科	300名	350名	収容定員 1,400名

9) 渡辺利文「入江先生の思い出」『温山会報』第62号、2020年2月。

10) 『学内月報』第20号、1978年8月1日。

人文学部	英語英米文学科	50名	80名	収容定員	320名
人文学部	社会学科	50名	100名	収容定員	400名

本年度、第12回学内ゼミ、第18回中四ゼミ、第25回全日ゼミが開催された。各ゼミから、また入江ゼミから参加したと思われるが、その参加状況、詳細は不明である。

9月16日、大学院経済学研究科（修士課程）の1979（昭和54）年度の入試（第1次）が行なわれた。志願者はゼロであった¹¹⁾

12月25日、去る6月29日文科省に申請していた3学部の定員増の認可がおりた¹²⁾

1979（昭和54）年2月11日、1979年度の入試が行なわれた。経済学部 of 文部省定員は350名に増えた。募集人員は350名とし文部定員にあわせた。経済学部の志願者は1,773名であった。合格発表は2月20日。入学者の確保を経済学部は450名とし、歩留りを考慮して974名を発表した¹³⁾

2月13日、伊達功経済学部長の任期満了に伴う経済学部長選挙が行なわれ、望月清人教授（46歳）が当選した¹⁴⁾

3月20日、第28回卒業式が行なわれ、経済学部は432名、経済学研究科修士課程は3名が修了した¹⁵⁾ 入江ゼミでは、泉、岡野、徳田、熊本、村本、窪田、河野、宇都宮、田中、宮内ら23名が卒業した。

3月22日、大学院経済学研究科（修士・博士）の入試（第2次）が行なわ

11) 『温山会報』第22号、1979年9月。

12) 国立公文書館、松山商科大学『学則変更申請書』、『学内月報』第25号、1979年1月1日。

13) 松山商科大学『昭和54年度入学試験要項』、『学内月報』第27号、1979年3月1日。『六十年史（資料編）』174頁。藤原保「昭和54年度本学入試の結果について」『温山会報』第22号、1979年9月。

14) 『温山会報』第27号、1979年3月1日。

15) 『学内月報』第28号、1979年4月1日。なお、『六十年史（資料編）』では、1978年10月の前期卒業生を含み、経済学部439名、経営学部405名、人文英語英米文学科71名、社会学科88名である。

れ、修士2名が受験し、2名が合格した。博士課程はいなかった¹⁶⁾

3月30日、去る1978年11月30日に文部省に申請していた大学院経営学研究科経営学専攻修士課程の設置認可がおりている。

7) 1979 (昭和54) 年度

研究科長2年目。

入江先生赴任29年目、大学院経済学研究科長2年目、55歳から56歳にかけての時期である。大学院の運営委員は本年度も伊達功と望月清人で、入江研究科長を補佐している。また、学校法人の評議員を続けている。

学長は伊藤恒夫が続き(3年目)、経済学部長は望月清人が新たに就任した(1979年4月1日～1981年3月31日)¹⁾

4月5日、午前10時より体育館において入学式が挙行され、経済学部は417名、経済学研究科修士課程は2名が入学した²⁾

本年度から定員増もあり、各学部で新しい教員が大量に採用された。経済学部では三好登(民法)、宮本順介(経済学)、鈴木陽一(中国語)が講師として採用された。

本年度の特筆すべきことは、大学院経営学研究科修士課程が新設されたことである。その経営学研究科の入試(修士)は4月22日に行なわれ、6名が受験し、4名が合格し、入学している³⁾

入江先生の本年度の担当科目は、経済原論I-1(2単位)、一般演習(2単位)、経済学史(4単位)、ゼミ1, 2(各4単位)、短大の経済学I(2単位)であった。そして、大学院では修士課程3年の亀井喜朗と博士課程3年の

16) 『学内月報』第28号、1979年4月1日。入江奨「昭和五十四年度経済学研究科について」『温山会報』第22号、1979年9月。『六十年史(資料編)』160～161頁。

1) 『六十年史(資料編)』126～131頁。『学内月報』第28号、1979年4月1日。『学内月報』第29号、1979年5月1日。『学内月報』第30号、1979年6月1日。

2) 『学内月報』第29号、1979年5月1日。なお、『六十年史(資料編)』174頁では、経済学部419名、経営学部420名、人文学部英語英米文学科126名、社会学科191名。

3) 『学内月報』第29号、1979年5月1日。『六十年史(資料編)』161頁。

渡辺利文を指導している。なお、渡辺のテーマは「恐慌論体系構築のための一考察」であった。

経済原論Ⅰ－1（2単位）の講義は、岩林彪経済原論Ⅰ－2（2単位）との共同講義で、入江先生の講義は、前年と同様で、マルクス経済学方法論、その基礎理論（資本論）を講義している。入江先生のテキストは未定となっている。

経済学史の講義も、前年とはほぼ同様で、古典学派の生成・形成・発展・転化を講義し、古典学派の転化としてマルクス経済学の形成、また限界革命論を講義している。なお、テキストは未定となっている⁴⁾。

本年のゼミ1には、柏木、篠崎、中嶋、浜田、森本らが入った。

ゼミ1のテキストはマーシャルの『経済学原理』で原書で読んでいる。そして、今年もサブゼミとして、マル経班、近経班、古典班、現状分析班にわけ、個別指導している⁵⁾。

本年のゼミ活動について、ゼミ生の一人は次のように述べている。

「今期の1部生は、マル経班、近経班、現状分析班、古典班の18名で構成されています。そのうち女性はただ一人。しかし、たった1人の女性にもかかわらず、男どもににするものぞと孤軍奮闘し、今では「つくし」に、合宿、ゼミの時間、その他諸々、男どもには気の付かない事はもちろんのこと、すべての面に渡ってゼミ活動にはなくてはならない存在なのです。

私達のゼミ活動は、本ゼミとしてアルフレッドマーシャルの『経済学原理』（原書）をテキストにして、貧困な語学力ゆえに悩みながら学習しています。その他にサブゼミとしてマル経、近経班に分かれ、同一の時間と場所を決めず、各班が自主的に自分達のテーマを決めて、そのテーマについて議論しあう形を取ったという事です。

マーシャルを討議し合っていく過程では皆だんだんと楽な方向へと流さ

4) 『1979年教授要目』

5) 『1979年教授要目』

れ、先生に叱責されることも数多くありました」⁶⁾

そして、本年度もゼミ大会めざして取り組んだ。

ゼミ2（片岡らの学年）も前年度からの継続として、シュンペーターの『経済理論』（原書）を読んでいる⁷⁾

また、入江先生はゼミ連顧問を続けている。

入江先生は、『温山会報』第22号に「昭和五十四年度経済学研究科について」を報告している。その大要は次の通りである。

「昭和五十四年度の経済学研究科学生定員と在籍者の関係を見ますと、修士課程総定員二〇名に対し、一名の在籍延長者を含めて在籍者六名、博士後期課程総定員一二名に対し在籍二名という状況です。

本年度の経済学研究科の専任教員数は二二名、うち授業実施者純一四名、延べ八名となっています。

先日両研究科合同の授業実施教員と院生との懇親会が催され、例年になく出席者が多く全部で二七名の出席者でしたが、そのうち院生は済研八名中七名と営研四名、計一名でした。済研関係教員中欠席二名でした。

このように教員側の大学院教育への熱意は強く、一対一の教育、あるいはそれは近い教育に情熱を傾けているのですが、ほとんどの教員が六〇名ないし一〇〇名の指導生をかかえ、短期大学部にも関係し、学部等の講義や指導のために要するエネルギーの莫大であることを考えますと、大学院にかかわる教育・研究のために、いかほどのことをなし得ているか、個々人の努力では解決しえない大きい問題があります。解決の方向は判っていますが、院生数などに関する諸状況を考えて、二の足をふんでいるところです。

6) 「I部ゼミ活動状況」『つくし』第12号、1980年4月1日、30～31頁。

7) 『1979年教授要目』

大学院の入試は九月前後と二月前後におこなわれることになっており、しかも九月前後が主とされています。けれども、残念ながら、経済学研究科の志願者は例年多くなく、昭和五四年度については九月期、ゼロでした。三月期は、やっと五名あったのですが（入学定員一〇名）、その中の三名は経営学研究科発足前であったため募集要項に含まれていた経営学研究科関係の研究を志す者でした。その受験生には、従って経営学研究科に出願するように要請し、結局、二名受験にとどまりました。彼等はみな優秀な成績であったので入学を許可しました（水準に達しない時には、たとえ合格者ゼロでもやむをえないという見地から選考しています）。

これからはまず、社会に要請して、少なくとも修士修了者の受けいれに積極的になっていただくように求めねばならぬと考えています。それを背景に修士課程の進学者をふやしていく工夫が必要と考えています。博士後期課程のにぎわいを求めるのは、それからのことと考えています。

来年三月期に修士課程修了予定者三名、博士論文提出資格取得に挑戦する者一名です。彼等の修士論文などの予定テーマは次の通りです。

（修士論文）

- (1) 価値形態論の一考察－宇野氏の見解を中心に
- (2) 土地問題に関する理論的研究
- (3) 「受益者負担」における「公共性」の役割

（博士後期課程）

恐慌論体系構築のための一考察⁸⁾

本年度、第13回学内ゼミ、第19回中四ゼミ（11月、山口大学）、第26回全日ゼミが開催された。入江ゼミのマル経班は中四ゼミ大会で「相対的過剰人口論を現代に適用する」を報告しているが⁹⁾、その他の詳細は不明である。

8) 『温山会報』第22号、1979年9月。

9) 『つくし』第12号、1980年4月1日、30～31頁。

9月17日に、1980（昭和55）年度の大学院入試（第1次）が行なわれ、2名が受験し、2名が合格した¹⁰⁾

入江先生は研究科長として、①博士論文提出資格認定試験について、特に外国語について、②研究科長選挙規程について等検討している¹¹⁾

10月、入江先生は、『松山商大論集』に論文「マルサス『人口論』初版におけるスミス」を発表した。それは、1973年12月の「国富論における有効需要覚書」『松山商科大学創立50周年記念論文集』以来約6年ぶりの論文であった。その間、経済学部長職に専念し、研究時間がとれなかったためと推測される。この論文は、マルサスの人口論がスミス体系を発展させる方向で展開しているか、それともスミス体系を批判し、新たな体系を提起する方向で展開されているかについて検討したものである。入江先生の結論としては、マルサスはスミス理論の眼目を正確に理解していたかどうかについて否定的であった¹²⁾

1979（昭和54）年12月末で、伊藤恒夫学長の任期が満了するので、学長選挙規程により推薦委員が選出され、11月1日、6日に推薦委員会が開かれ、稲生晴教授1人が推薦された。そして、11月20日、学長選挙が行なわれ、稲生晴教授（53歳）が選出された¹³⁾

1979（昭和54）年は新制大学昇格30周年にあたり、12月、『松山商科大学新制30周年論文集』が刊行された。入江先生も「マルサス『人口論』把握の諸類型」を執筆した。この論文は、マルサス研究、マルサス人口論研究の一環であるが、研究時間が十分にとれなかったためだろう、「覚書」にとどまっている。入江先生はマルサス人口論の把握を5つに類型化した上で、特にエンゲルスとマルクスの批判を紹介している¹⁴⁾

10) 『学内月報』第35号、1979年11月1日。

11) 『学内月報』第34号、1979年10月1日。『学内月報』第35号、1979年11月1日。

12) 入江奨「マルサス『人口論』初版におけるスミス」『松山商大論集』第30巻第4号、1979年10月。

13) 『学内月報』第36号、1979年12月1日。

14) 入江奨「マルサス『人口論』把握の諸類型」『松山商科大学新制30周年論文集』199年12月。

1980（昭和55）年1月1日、稲生晴が第7代松山商科大学学長・理事長に就任した。

また、稲生理事の理事長就任に伴い、補充選挙が行なわれ、伊達功が新しく理事に就任し（1980年1月1日～1980年12月31日）、稲生理事長を補佐することになった¹⁵⁾

なお、稲生理事長が入江先生に理事就任を要請したが、断わったため、伊達功になったものと思われる。

2月11日、1980（昭和55年）年度の入試が行なわれた。経済学部への募集人員は350名で、経済学部の志願者は1,842名であった。合格発表は2月20日で、経済学部は1,025名を発表した¹⁶⁾

2月29日、入江奨経済学研究科長の任期満了による研究科長選挙が行なわれ、入江先生が再任された。また、運営委員には望月清人（経済学部長）、伊達功教授が引き続き選出された¹⁷⁾

3月19日、午前10時より第29回卒業式が体育館にて行なわれ、経済学部は400名、経済学研究科修士課程は2名が修了した¹⁸⁾ 入江ゼミでは宇山、岡田、片岡、川元、田口、檜垣、新山、真鍋、武田ら24名が卒業した。このうち、片岡は翌1981年度に大学院経済学研究科に進学する。

3月21日、経済学研究科（修士・博士）の入試（第2次）が行なわれ、修士1名が受験し、1名が合格した¹⁹⁾

入江先生は研究科長として、院生の研究活動の奨励に心を砕き、「松山大学大学院院生研究奨励旅費規程」を作成し、学会旅費の補助を決めている（1980

15) 『六十年史（資料編）』126～131頁。

16) 松山商科大学『昭和55年度入学試験要項』、『学内月報』第38号、1980年2月1日。『学内月報』第39号、1980年3月1日。岩橋勝「昭和55年度入試実施の概況」『松山商科大学学園報』第46号、1980年3月1日より。

17) 『学内月報』第39号、1980年3月1日。

18) 『学内月報』第40号、1980年4月1日。『六十年史（資料編）』141、161頁。学部の卒業生数は1979年10月卒業を含む。

19) 『学内月報』第40号、1980年4月1日。『六十年史（資料編）』161頁。

年4月1日制定)²⁰⁾

(以下, 次号)

20) 『大学院学生便覧』